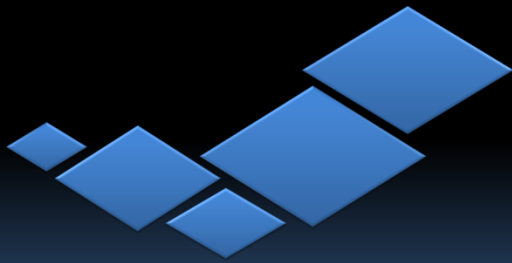




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第14号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2011-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73499
Type	journal
File Information	DRFmonthly_14.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第14号

No. 14 March, 2011

【特集1】新春ワークショップ報告

【特集2】明日に向かって！最新取り組み特集

東北地方太平洋沖地震で被災された方々に、心より
お見舞い申し上げます。

特集1 新春ワークショップ報告

2月17日 名寄せのこれから～研究者IDサミット～

●なぜ研究者の名寄せが必要か 蔵川圭（国立情報学研究所）
研究者の学術研究の貢献度を正確に測るためには、名前の曖昧性の問題を解決して、研究成果に記述された著者の名寄せを行う必要がある。

●研究者同定に向けての実証実験 守本瞬（金沢大学）
IR、業績DB、JAIR、研究者リゾルバーの4つのシステムが研究者識別子を介して連携することで、名寄せができるシステムを構築中。

●事例報告「作業用データベースを介した著者同定」
徳安由希（九州工業大学）
作業管理用のエクセルファイルをシステム化した。図書館システムの利用者データと連携し、職員番号をもとに著者同定を行う。

●研究者IDとリポジトリシステム
鈴木敬二（元大学図書館職員）
DSpace1.6からは「典拠フィールド」が標準で実装されるため、著者典拠から検索することで、研究者識別子を簡単に扱えるようになる。

●フリーディスカッション

・名寄せに関するWGを立ち上げませんか。
・海外に先駆け、日本で名寄せシステムを完成させてしまいませんか。
・識別子を入力しておく、様々なDBで名寄せをすることができるはず。
・日本の研究領域には、和文の世界と欧文の世界がある。どちらにもコミットするしるみの検討が必要。

このWSは、金沢大学がCSI委託事業の領域2で行っている「オープンアクセス環境下における同定機能導入のための恒久識別子実証実験」に関連したものです。
http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kura/nayose_ws.html



当初予想をはるかに超える27名の方に参加いただきました。
名寄せは、大学図書館だけで済む話ではなく、出版社などの業者との連携も視野に入れておく必要があります。機関リポジトリの世界から学術情報流通の世界に展開していく話題だなぁと実感しました。

レポーター 守本瞬【金沢大】



たとえば日本国内に「S. Sato」という研究者が何人いるじゃろ？これとこれは同じ「S. Sato」だ、とわからなければその人の仕事の全体像が見えてこないわけじゃ。つまり名前を寄せ集めなきゃならん。図書館目録の「典拠」の話で出てくる『著作の集中』を、論文の世界で、国際的スケールで、どうウマく実現していくか、それがこのサミットの勘所というわけじゃ。

名寄せって？

2月18日 DRFtech-Kumamoto

●基調講演「機関リポジトリとオープンアクセス」小山憲司（日本大学）

IRはOAの実現方法の一つ。また、近年出版社もOAによるビジネスモデルを模索している。そんな中でIRはその機関の特徴を生かした研究成果の公開とその方法を検討していくべき。

●事例報告「新潟大学学術リポジトリ：コンテンツ収集の取り組みについて」
住石智子（新潟大学）
雑誌単位・論文単位での許諾確認から著者単位の一括許諾確認にシフト。依頼した教員の4分の1が回答し、その9割以上が在職中の全ての研究成果の登録を許諾した。

●事例報告「熊本大学学術リポジトリについて」新野靖（熊本大学）
2010年12月大学評価システムと連携開始。IRからの業績流用入力や、IRへ論文登録申請が可能になった。

●事例報告「熊本大学学術リポジトリとの関わりについて」村上慎哉（熊本大学）
ILLで複写受付があった熊大紀要論文のIR登録を教員に依頼し、98件中49件を登録。在任中全ての紀要論文を許諾したのは68人中30人。



IR末構築の機関にとっては、IRの導入・運用の基礎知識を得ることができたのではないのでしょうか。図書館のためのIR登録推進になりがちですが、研究者にIRの意義を理解してもらい、ともにIR登録を推進することが大切だと改めて思いました。

レポーター 柿原友紀【熊本大】



●1. 研究者と友だちになろう Cafe : Open Access 土出郁子（大阪大学）
研究者・院生と情報の入手方法や情報発信などをテーマに話し合うカフェ「知のオープンアクセス」を隔月で開催。顔見知りを増やし、お互いのことを知ることができる。

●2. 本学リポジトリの現状と課題 近藤喜和（奈良先端大学院大学）
IRの本文の大多数は電子図書館で見ることができる。現在は、業績DBとの連携に向けて既存の業績情報のマッチング作業中。IRのカスタマイズをDRF技術サポートWGのサポートにより実施し、自分で操作したことが自信となった。

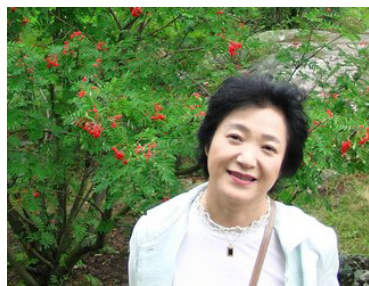
●3. ROATプロジェクト&UsrCom 森一郎（千葉大学）
いくつかIRの統計調査が行われているが、統一された基準で行われておらず、比較ができない。ROATは統一的な基準でIRの利用統計が取得できる環境を提供する。UsrComは各種IRシステムの試用と情報交換ができる環境を提供する。

●機関リポジトリ業務に必要なシステムの知識
深川昌彦（山口大学）
可視性向上のためにはクロールとハーベストへの対応が必要。長期保存のためにはファイル管理とバックアップ機能が必須。バックアップは複数サーバーが理想だが1台のサーバーを二重化してもいい。資料の裁断が不要なハンディスキャナー「Anyty」の紹介。

●自分でできる登録実習～UsrCom サイト利用ガイダンス
前田信治（大阪大学）

UsrComの利用登録からメタデータ登録までを解説。データは1週間で消えるので失敗を気にせず利用できる。マニュアルはDRF-wikiの「リポジトリをつくる」>「リポジトリシステムを試す」にある。

事例報告 機関リポジトリをめぐる活動紹介



Profile

城西大学水田記念図書館
若生 政江

リポジトリ歴2年

城西大学機関リポジトリ(JURA)
<http://libir.josai.ac.jp/>



学務課の協力の元、論文投稿料申請時にPDFを集めています。

今まで学外発表論文は、別刷りを収集して年度ごとに製本していました。この別刷りは教員が論文投稿料を申請したときに提出されています。そこで別刷りと一緒にPDF版で集められればリポジトリに登録できるのではないかと考えました。学長宛ての「論文投稿料申請書」の受け付け窓口は学務課です。最初に学務課長名で各学部事務長に論文投稿料申請書の提出書類の変更について教員に周知していただくよう文書でお願いをしました。もちろん学長から各学部長へは会議の中で連絡はされていますが、各教員から学部事務室への問い合わせがあることを念頭に事務局に理解・協力をいただくことを考えました。「論文投稿料申請書」には、「城西大学機関リポジトリに登録することを許諾し、別紙許諾書および登録用の電子媒体(PDF等)を提出いたします。」と入れたフォーマットにしています。年に2回くらい集まった論文の著者版と許諾書が学務課から届きます。まとめて届くので登録もまとめてでき効率的です。

case 1

ただし、許諾書やPDFは届くのに、刊行元のポリシーによりリポジトリ登録ができないものもたくさんあります。教員へ登録できない事情を説明し、学協会の方針が変わるまで預かりますと言っています。学会の理事長を務められている学部長から、総会でリポジトリについて説明するからと資料を提供したこともあります。その学会は方針がブルーになったこともありました。

科研費報告書と学位論文は学内他部署の協力の元に。

科研費報告書については、毎年教務課で、教務部長名で該当教員に研究成果報告書の提出の依頼文書を送りますが、この中に提出された報告書は、「リポジトリへ全文を登録・保存すること」、「登録許諾書は、図書館へ提出すること」を入れていただきました。教務課から該当者全員のPDF版が届きます。

学位論文(博士)は、論文提出窓口である学部事務室で「博士論文の電子的公開について」の説明文書を配布していただき、論文提出時にPDF版と許諾書を合わせて学部事務室で受け付けていただくようにしました。

学内他部署との連携の元、包括的かつ効率的に論文を収集



Profile

静岡大学附属図書館
杉山 智章

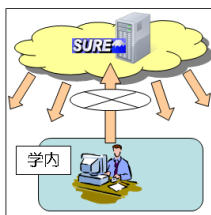
リポジトリ歴3年

静岡大学学術リポジトリ(SURE)
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>



コストと安定性を考えてクラウドに移行しました。

静岡大では2010年から全学的に情報基盤をクラウド化しました。リポジトリサーバについてはこれまで図書館内に設置していたのですが、全学的な取り組みに合わせてVPS(Virtual Private Server)に移行することにしました。移行を決めたメリットとして大きかったのは経費の節減になることと、システム管理が楽になることです。今回のクラウド化でリポジトリサーバにかかる図書館の負担はゼロになりました。また、機関リポジトリには機関内の研究成果を“永続的に”提供する役割があり、事件・事故から大切な成果物を守るため、データをクラウド上に保管するのは有効な手段と言えます。SUREでは、念のため毎日夜間に差分バックアップを手元にも取っています。リポジトリのサービスとクラウドはとても相性が良いと思います。



case 2

サービス向上のためのコンスタントなバージョンアップ。

SUREでは、研究者からの要望や図書館内の検討で、リポジトリソフトの改修を逐次行っています。そうしていると、以前カスタマイズした機能や、これから欲しいと思っている機能が最新バージョンで実現していたということがよくあるのです。みんな考えることは同じなのだ実感しています。だから一番需要に合致した最新バージョンを使うのが一番リーズナブルなのです。セキュリティの面でも、既知のバグがどんどん修正されていきます。もちろん新しいバグの可能性もあるのですが、そのような問題をみんなで改善し進歩させて、サービスの向上につなげていくのは創造的で面白いことだと思います。業務の継続性の観点からも、古いバージョンにカスタマイズを入れるより、ホットなバージョンにして後任者に引き継いだほうが、後任者も仕事がやりやすいでしょうし、サービスをより発展してくれることを期待できます。

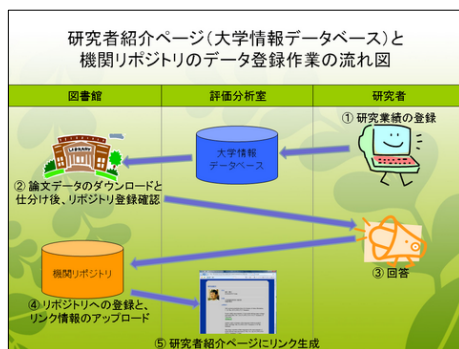
静岡大のクラウドサービスのモデルについては、次の記事に詳しい。日本経済新聞2010年9月29日(水)15面「静岡大発ベンチャー 低料金のクラウド仲介」

需要に合致した最新バージョンを使うのが一番リーズナブル

研究者紹介ページとの連携を継続的に行なっています。

東北大学では研究者紹介ページに掲載されている個別論文に機関リポジトリへの直接リンクを設置し、研究者紹介ページを閲覧する利用者が論文本文を参照することができるようにしています。

連携の方法は、1)教員が論文データを東北大学情報データベースへ登録します。2)図書館が東北大学情報データベースから論文データをダウンロードし、仕分けをした後、各教員へリポジトリ登録可否を問い合わせます。3)教員がリポジトリ登録可否を図書館へ回答します。4)図書館が登録可の論文をリポジトリへ登録し、リポジトリ登録情報を東北大学情報データベースへアップロードします。5)東北大学情報データベースのデータを基に研究者紹介ページが作成され、リポジトリの該当論文へリンクが作成されます。これまでのリンク件数は、2009年は約1,000件、2010年は約1,600件です。なお2009年リンク作業時の問合せ教員数は約500名で、回答率は約半数程度。2010年リンク作業時の問合せ教員数は約700名で、回答率は前年同様でした。



さらなる機能向上と論文登録数の増加に向けて励ましの言葉も

リポジトリと研究者紹介ページとの連携は、多くの教員から良好な反応をいただいています。また、さらなる機能向上と論文登録数の増加に向けて励ましの言葉もいただいているところです。今後はより親密な連携ができるようコストバランスとともに検討と改善を重ねていければと思っています。

リポジトリと研究者紹介ページとの連携は、教員から良好な反応をいただいています。

研究者情報との連携「論文リンクシステム」

九州大学学術情報リポジトリ(以下、QIR)と九州大学研究者情報(以下、研究者情報)は、2006年度より「論文リンクシステム」によって連携をはじめました。「論文リンクシステム」とは、双方の独立したシステムに負担がかからないよう、中間サーバをたて、情報をうまく取り出し、そこで紐づける仕組みです。【紐づけの方法】研究者自身が、研究者情報の論文情報から「SearchQIR」ボタンをクリックするとQIRを論文名で検索し結果を表示します。QIRに自著が登録されており、該当論文がヒットした場合はその画面から紐づけ情報を登録(=リンク)することが出来ます。ヒットしなかった場合には論文情報を流用し新規にセルフアーカイブすることも出来ます。紐づいた論文には「FulltextQIR」ボタンが付きリンク完了です。

現在の紐づけ情報は700件ほどですが、ROATなどの統計結果を見ると研究者情報ページはQIRへのアクセス元として上位にランクされています。

連携の強化 これまでも・これからも

研究者情報は、九大研究者の基本情報、教育・研究・社会活動を収集する大学評価情報システム(DHJS)の公開できる部分を抽出したシステムです。DHJSの入力は「大学の一員として大学運営に協力する義務のひとつ」とされ、その入力率は99%と高いものです。当初は担当する大学評価情報室と何度も話し合いを持ち、連携を実現したと聞いています。最初の連携から、毎年少しずつですが強化もしてきました。昨年はDHJSの論文入力フォームにQIRの登録論文数や登録状況の表示を追加、さらに研究者情報の論文情報画面では、QIR未登録を示す「SearchQIR」ボタンと登録済みの「FulltextQIR」ボタンが一目で分かるよう色分別しました。今年度はDHJS側で、QIRのメタデータとよりスムーズに連携出来るよう項目の見直しを実施、さらにDHJSからのQIR論文登録を見据えてアップロード機能を追加予定です。

研究者情報の論文7万件、QIRの論文1万6千件、さらなる連携を目標に！



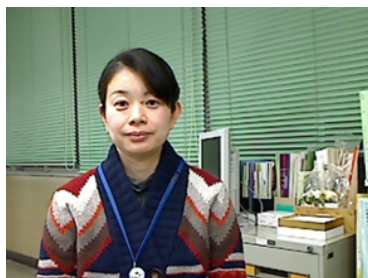
Profile

東北大学附属図書館

菅原 透

リポジトリ歴3年

東北大学機関リポジトリ(TOUR)
<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>



Profile

九州大学附属図書館

吉松 直美

リポジトリ歴3年

九州大学学術情報リポジトリ(QIR)
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/>





Profile

北海道大学附属図書館
城 恭子

リポジトリ歴1年

北海道大学機関リポジトリ(HUSCAP)
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/>



研究室訪問:いいとも作戦

HUSCAPは5周年を迎え、学内認知度もかなりアップしていると感じますが、どうすればHUSCAPをもっと利用してもらえるのか、実際のところを研究者に聞いてみよう！ということで始まったのが「いいとも作戦」です。インタビューした先生に、次に訪問するといく研究者を紹介してもらい、次々に訪問相手を予約していく作戦で、HUSCAPの営業だけに留まらず、研究者の生の研究活動についてもお話を伺っています。2010年7月のスタートから、これまで26名(教員20名/大学院生6名(留学生1名を含む))にインタビューを実施しました。

HUSCAPサービスの向上はもとより、図書館全体に還元できる可能性のある示唆に富んだご意見をいただくに



ともあり、非常に有意義な活動だと感じています。

みんなでHUSCAP

北海道大学には、15の学部図書室があります。従来は中央部署で一括管理していたリポジトリ業務を、2010年度から全学部の図書室で担当することになりました。自学部の先生から自発的に提供があった論文について、著作権調査から登録までの作業、広報活動なども行っています。サービスの最前線であるカウンター担当職員が業務を担うことで、図書館サービス全体の底上げにもつながるのではないかと期待しています。

ノーベル賞受賞関連論文の出版社版をHUSCAPに掲載

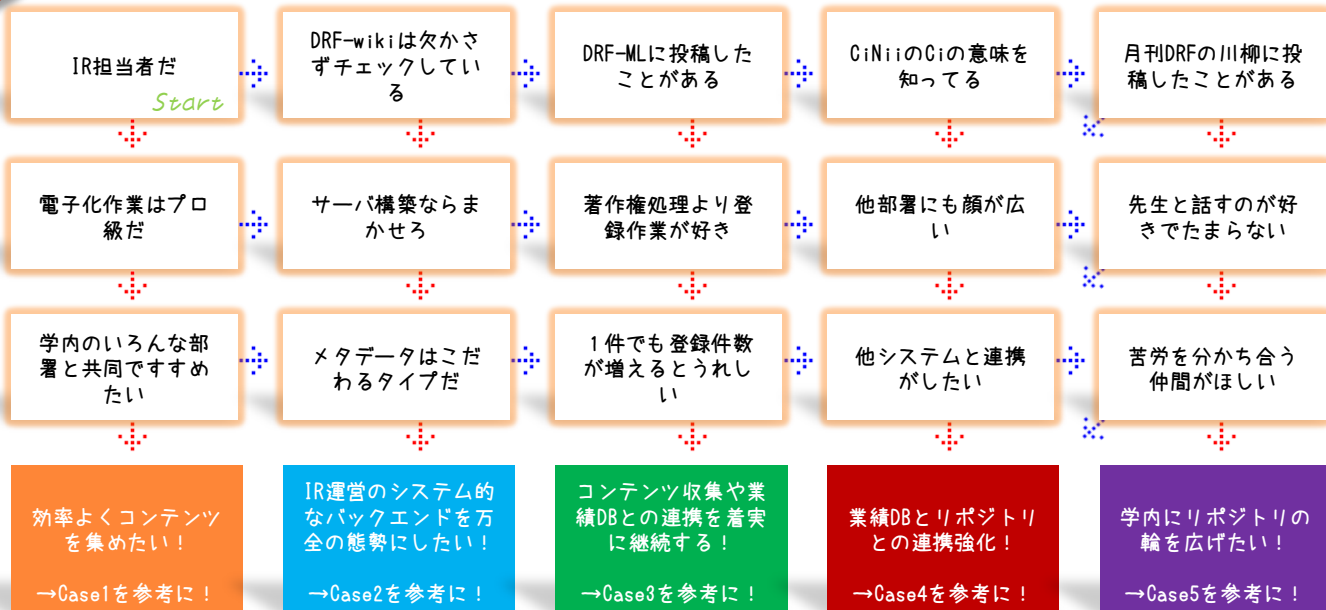
ノーベル賞受賞に係る論文が掲載されたジャーナルであり出版社であることがリポジトリを通じて広く世間に知られることで、出版社にもメリットがあることを説明し、一ヶ月以上の交渉の末、許諾を得ることができました。「交渉とは、win-winの関係を築くことだ」(本件から得た格言です)

研究室訪問「いいとも作戦」でHUSCAP&図書館全体のサービス向上のヒントを探る。

チャート式

平成23年度に向けて、あなたの密かな野望当てちゃいます！

Yes No



次号
予告

【速報】COAR総会 2011

3月28-29日にハンガリーで開催されるCOAR総会の現地レポートです。

【特集】平成22年度 DRF活動報告

DRFの各ワーキンググループとプロジェクトの活動について報告します。

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第14号 平成23年3月15日発行 デジタルリポジトリ連合